

エデュコ **Educo**

地球時代の教育情報誌

No.38
2015年 秋



笹岡 隆甫 さん

華道「未生流笹岡」家元

巻頭インタビュー p.2

知っておきたい教育 NOW p.4

総合的な学習の時間を中核としたESDの取り組み
ESDで向かう「二十一世紀型」生徒の育成

きょういく見聞録 p.8

11歳の異文化交流
～グローバル人材への第一歩～

地球となかよしトピックス p.10

「ここが地域の中心地」
一先生と児童が共に学ぶ、エネルギー教育
福島県猪苗代町立長瀬小学校

インフォメーション 北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14

学校(現場)で学ぶ、教育インターンシップ研修

コラム p.15

PISAやTALIS調査から見える
日本の教育の現状と課題

ほっとな出会い p.16

エスコートナース 山本 ルミさん



「花から学ぶ」ことが、 いけばなのなのです。

華道「未生流笹岡」家元 **笹岡 隆甫**さん

「蕾がちに生けよ」―花から学ぶ

日本のいけばなは、独特な花との向き合い方をしています。例えば花を生ける時には、「蕾がちに生けよ」と教わります。必ず蕾も残して生け、蕾がほころぶ過程を見届けるのです。「時間経過」は、いけばなの一番大きなテーマだと思います。また、花を生ける時には花の顔を必ず上に向け、生き生きとした花の姿が表われるようにします。その姿から「太陽に向かつて伸び上がるような、前向きな気持ちを常に持たなくては」と学ぶ人もいます。 「花から学ぶ」ことが、いけばなのなのです。

花の声なき声を聞く

日本人には古くから自然への敬意が受け継がれています。その中でも、花の命にじかに触れることができる。伝統文化は、いけばなだけです。子どもたちには、花が咲き、散るまでの過程を見届けることで命の小さなさを実感し、命を大切にしたいなと思います。

「美しい花を多くの方と共有したい」という思いが、いけばなが始まったきっかけでしょう。花を育てることで、その思いを体験できれば素敵です。教室で先生が花を飾るのを見て、子どもたちも花を飾り、お世話もするようになると、なおいいですね。

ある幼稚園の理事長は「花を育て



PROFILE

1974年京都生まれ。京都大学工学部建築学科卒業。2011年に三代家元を継承。国内外で花手前（いけばなパフォーマンス）を披露。著書に「いけばな」、「百華の教え」等がある。

ることができない人は、幼稚園の先生にはなれない」と言っていました。花は動物のように、吠えて「のどが渴いた」と伝えることができません。常に花の声なき声を聞き、見守ることが、花を育てることだと思えます。子どもも同じです。子どもたちの話をしっかりと聞き、見守ることは、花の声なき声を聞き、お世話をすることと、とても近いのではないのでしょうか。

不思議なことに、花を生けるとその場が明るくなります。華道家は花を生ける時には部屋を片付けるので、部屋もきれいになって一石二鳥です。花がよく手入れされている家には、泥棒が入りにくいそうです。それだけ、人のお世話する心が感じられる空間は大事なのだと思うのです。

建築との相似

学校の先生方には、いけばなの技術を習い、教えるだけではなく、花を生けることの意義や、花との向き合い方を知っていただきたいと思えます。京都の教室には、台湾や中国などからの留学生向けの教室もあります。留学生たちにとって、日本で

いけばなを学ぶことは大きなステータスになっていて、それはとてもうれしいことです。私はいけばなを3歳頃から習い始めたので、論理よりも身体で覚えたようなところがあります。しかし大学で建築を勉強するうちに、いけばなに見られるような建築デザインが多くあることに気づきました。例えば非対称のデザインや、ルート2...1の比率、「白銀比」を使うことなどです。それらが他の日本文化にも通底していることを知り、「いけばなを論理的にきちんと説明したい」と思うようになりました。

京都府の伝統文化カリキュラム

京都府は伝統文化教育に非常に熱心で、多くの学校で授業に取り入れています。また複数の高校で、文部科学省の補助を受けて正規授業として伝統文化教育の時間を持ち、いけばなの先生が講師として各学校へ行

くプログラムも始まっています。いずれこのプログラムが必修となり、全国的に広がると素敵ですね。

われわれの任務は、次世代を担ういけばなの先生を育てることです。昔とは違い、花の先生をするだけで生計を立てるのは難しいことです。現状のまま続けるのか、それとも新しい仕組みを家元サイドで作るのか。試行錯誤しつつ、日本の文化を広められる人を育てることが使命だと思っています。

哲学としてのいけばな

『花から人生の指針を得る』ような花との向き合い方を、多くの人に知ってもらいたい」ということが、今後の目標です。先人のたどってきた道を、われわれもたどる。そしてその道をたどることにより、自分の人生の道を見つめる。「道」という言葉には、この2つの意味があります。「哲学としてのいけばな」を、若い人たちに是非知って欲しいと思います。教室ではどうしてもテクニク中心に習います。けれどそれを通じて本当に知って欲しいことは、哲学的な、いけばな教室の授業だけでは教えきれないことです。そ

れは花と向き合った人たちが自分ですっきりと感じ取ってくれなければ、腑に落ちてもらえないことなのです。その部分を感じ取ってもらうためのきっかけを、これからどう作って行くか。流派の先生一人一人が、大切なことを伝えて下さるようにしていくのが、私の務めだと思っています。

東京オリンピックで花手前を

2020年の東京オリンピックの開会式で、花手前を披露したいと思っています。そして国内外にいけばなをさらに広めて行くことが、私のこれからの大きな勤めです。単に技術を伝えるのではなく、いけばなの精神性やデザインの奥に潜む考え方を伝えることが、これからの日本、そして世界に役立つと思うのです。

いけばなは不安定なデザインで、左右の均衡が崩れています。これは非常に懐が深いデザインで、時間経過によっても崩れないし、別の要素が入っても崩れず、それによってより新しい面白い空間ができる可能性を秘めたデザインなのです。その「懐の深さ」が、これまでの日本の発想の源泉でした。それをもう一度、日

本人みんなが再認識すれば、今は少し固くなっているかもしれない日本人の頭は柔らかく戻ると思うのです。日本人がこれから世界で役に立つ存在になるためには、日本人の持つ強みを、もっと海外の人たちとシェアしなくてはなりません。その一つが、「柔軟な懐の深い発想力」です。もちろん、自然に対する敬意も大切です。自然は抵抗しようとしてもしきれない存在で、西洋では自然を遮断し、家の中をシェルターにしてしまいました。しかし、日本人は家の中が自然につながるような環境で生活し、さらに「人間が自然の一部である」という発想を持っています。これは結構大きな発想だと思えます。

いけばなを義務教育に

私はいけばなを義務教育化したいと思っています。学校の先生方に、花を生けることの意義や、日本人の花との向き合い方をしっかりと知っていただきたいのです。せっかく日本には素敵な文化があるので、それを知ってもらおう機会をこれからもっと増やして行きたいと思えます。

総合的な学習の時間を 中核としたESDの 取り組み



文部科学省初等中等教育局視学官
田村 学

1 学校教育でのESD

4月号ではESDの概要について、「ESDってなに?」「なぜESDなの?」「どのように学校教育とつながるのか?」などの視点で記してきた。

今月号では、具体的な学校を事例として取り上げ、各学校でのESDの取り組みを具体的にイメージしていきたいと考えている。

2 京山中学校の取り組み

ここで取り上げて紹介したい学校が岡山市立京山中学校である。平成27年2月のリーフレットは次のような記述で始まる。

地球的視野で未来を考え、地域のために社会貢献できる生徒を育てるために、「グローバル」な視点を活かした授業・活動を通して、思いやり・夢・志を大切に、共に育ち合う学校づくりを推進しています。「環境」「平和」「人権・多文化共生」「キャリア教育」を軸に、「つながり」「関わり」をキーワードに、ESDの視点で3年間の教育活動を見直し、具体的な発見・探究・解決・提案の過程で、W型問題解決モデルを意識した探究活動を通して、持続可能な社会づくりの価値観を身に付け、「気づき、考え、行動する」生徒に育ってほしいと願っています。平和学習では、広島フィールドワークを通して共に生きることの大切さを考えます。環境学習では、水俣を見つめ、自らの生き方と照らし合わせ、持続可能な地球の未来を考えます。生徒一人一人の探究課題に、自ら答えをみつけ、地域提案する「夢の種」をみんなで育てています。

この文章から、ESDの考えを学校教育の中核に位置付け学校経営していることが理解できるであろう。各学校が目指す教育方針や生徒像と、ESDの考え方は極めてシンクロしやすく、各学校においてはESDの視点を生かした教育課程の編成と実施を、京山中学校の取り組みを参考に進めていくことが考えられる。京山中学校のESD推進の特色は以下の三つである。

① 総合的な学習の時間

- ・ 自校版学習指導要領の作成
- ・ 評価規準表（グレード表）の作成
- ・ W型問題解決モデルによる探究活動
- ・ 育てたい力を明確にした単元配列表作成

② 教科横断的な単元学習プログラム

- ・ 11単元の開発
- ・ 思考力等の育成に向けたグレード表作成

③ 地域との連携・協働

- ・ 総合文化発表会の開催
 - ・ 公民館での提案、発信
 - ・ 社会貢献意識を高める委員会活動
 - ・ 地域との連携、協働による取り組み
- 中でもその中核を担うのが、総合的な学習の時間での取り組みである。1年生は、地域学習として「大好き! 京山」

の単元を実施する。探究学習の基礎を学びながら、魅力や地域の課題をパンフレットや新聞で発信していく。2年生は、地球人として「共に生きる」単元を行う。広島学習と関連付けた探究活動を職業体験へと発展させ、総合文化発表会などで発表していく。3年生は、「地球は一つ！つながる願い」の単元で、農家民泊などを体験しながら環境学習を推進していく。環境宣言の作成などを通して命などを考えていく。

3 総合的な学習の時間とESD

ESDを教育活動に取り入れる際には、学校の教育活動全てで行うことが考えられる。中でも、京山中学校のように総合的な学習の時間をメインフィールドにすることは有効な方法である。

なぜなら、総合的な学習の時間は、各学校で育てようとする資質や能力および態度を設定し、学ぶべき内容も各学校で定めることになっている。持続可能な社会づくりに求められる「批判的に思考し、判断する力」「未来像を予測して計画を立てる力」「多面的、総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態

度」「責任を重んじる態度」などの育成にダイレクトに結び付くようにカリキュラムをデザインすることができると。

また、持続可能な社会に相応しい「多様性」「相互性」「有限性」「公平性」「連携性」「責任制」などの価値観を形成するよう、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代社会の課題を内容として扱うことが考えられるからである。

4 アクティブ・ラーニング

総合的な学習の時間は探究的に学び、協同的に学ぶことを特徴としている。まさに「問題の発見と解決に向けて主体的協働的に学ぶ学習」、いわゆるアクティブ・ラーニングを行うことになる。

一人一人の子どもが、身の回りの問題を現代社会の課題と結び付けて、異なる多様な他者と力を合わせ、対話を重ねながらその解決に取り組む。その過程において、期待する能力や価値観が確かに育まれていくものと期待することができる。

5 カリキュラム・マネジメント

先に示したように総合的な学習の時間

は、各学校でカリキュラムをデザインする。そして、そのカリキュラムを適正に運用していかなければならない。まさにカリキュラム・マネジメントを実施していくことになる。

中央教育審議会教育課程企画特別部会では、新しい教育課程の基準の検討に向けて論点を整理した。そこには、アクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネジメントを連動させた新しい教育課程の確かな実現を目指していく方向性が示された。

総合的な学習の時間を中核としてESDを充実させていく京山中学校の取り組みは、次期学習指導要領を先取りしていく取り組みとも考えることができるかもしれない。

●引用・参考文献

- 「京山から世界へ！つながる願い」（平成27年2月、岡山市立京山中学校）
- 「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究（最終報告書）」（平成24年3月、国立教育政策研究所）

ESDで向かう 「二十一世紀型」 生徒の育成



愛知県岡崎市立新香山中学校
校長 名倉 嘉章



愛知県岡崎市立新香山中学校
教諭 山口 裕嗣

「私は、エネルギーについて調べました。最も気になったのは、原子力発電のことです。原子力発電は、放射線が、放射性廃棄物のごみになっても出続けるし、将来その放射線が何も出ない状態に戻るには、なんと十万年もかかるって言われています。今、世の中の人は原子力発電の安全性についてどうしようどうしようって言ってやっているけど、私は何の罪もない後世の人たちに原発のごみを預けるだけだと思っています。その人たちは何も悪くありません。私たちは、今の私たちのためだけに原子力発電を使っている気がします。未来の私たちは原発がついていたことに関して何の得があるのでしょうか」

七月環境学習「エコで乗り切れるか今年の夏」での生徒Aの発言より



環境学習における「ESDの手立」について

私たちの研究の原点は、「未来志向の生徒づくり」である。環境学習を基軸としたESDの研究も六年目を迎えた。本年度は、新香山環境学習プログラムの実践検証、ESDの概念や手立てを各教科の授業に取り入れた実践に加え、子どもたちの生活そのものにアプローチし、未来志向の学校教育モデルの在り方を構想し、体系化していく研究に取り組んだ。そのキーワードが「自己肯定感」であり、「二十一世紀型スキル」である。

本校では、ESDは、概念であるが、方法でもあると捉え、環境学習を基軸としてESDの授業研究を行ってきた。その中で、探究学習におけるESDの手立ての検証を進めてきた。指導案の中に下図のような視点表を設け、意図的に手立てを構想している。

これまでの研究で、かかわり合いの中で生徒の思考にゆさぶりをかける教師の側がESDを意図したものならば、生徒の思考や話し合いの方向も未来志向であったり、世代を乗

視点	つながり			活動	手立て
	教材	人	能力・態度		
S 相互性	○			3	自分の立場を明確にし、討論に参加する。
I 有限性	○			3	未来志向でエネルギーを考えたとき、リサイクルがこれからの地球には重要ポイントであることをおさえる。
C 責任制	◎	◎	◎	4	「消費者を育てるための話」をゆさぶりの資料として提示し、消費者のためというキーワードをおさえて板書する。
A 連帯性	◎	◎	◎	5	討論を通して、自分も自分ができるエコアクションに取り組む必要性を感じる。

「ESD」を生活の場に取り入れる取り組み

研究を通して、環境学習を通してESDのキーワードは「探究」であることが実感できる。さらに、学びが深まるにつれて「世代を超えた倫理観」を学ぶ道徳的な授業の必要性が高まってきた。また、私たちは、この実践を通

り越えた倫理観に迫ることができると考えてきた。冒頭の「エコで乗り切れるか今年の夏」の授業では、「電力使用5%削減目標」に対し「可能か不可能かで話し合いが盛り上がる中、教師は「原子力発電所の再稼動によって削減目標廃止のニュース」を提示したところ、生徒は一齐に「エコ活動の意義と必要性」を発言するようになった。この授業のように授業者が関わり合いの場面で子どもたちの思考や思いに積極的に仕掛ける（ゆさぶる）ことの大切さがあらためて確認できる。



「ESD」で学校づくりを進める構想

これまでの実践を「ESD」の視点で振り返ってみると、環境学習を研究の基軸として

して、学びのキーワードを「つながり」とした。さらに今後は、生徒の行動化のキーワードを「つづける」としている。未来志向の環境学習での視点は、まだ見ぬ世代だが、生徒の生活と行動は「すぐ先の未来」である。生徒の日頃の行動こそESDの検証場面であると考えている。例えば、トイレのスリッパをそろえることも一番近い未来の人を意識した行動として、校内のトイレのスリッパをそろえ、「フラグ」をあげようという取り組みも実施している。資料のようにこの活動で生徒が実感した「思い」は、ESDの概念や目指す能力によって仕分けすることができた。まさにESDが生活や行動の指針となっていた。まさにESDが生活や行動の指針となっていたといえる。さらに昨年、「トイレのスリッパが整えられた日にあがる黄色のフラグ」が百回目に上がったのが一月二十三日、「つづける」行動力が成果として現れた「記念日」となった。

つも学びのフィールドが教科学習、生徒指導、学校づくりにまで拡散してきた。私たちが目指す生徒像は、いつのまにか環境悪化に立ち向かう姿だけではなく、未来社会で自信を持って生きようとする若者像となってきた。環境学習では「自然を意識する感受性」と「世代を乗り越えた倫理観」が学びのキーワードであると検証してきたが、未来社会の創造に向けて、教科横断的に、また系統的に学習していく中で「批判的思考力」「自己肯定感」「コラボレーション能力」などの必要性が教師間から挙がるようになってきた。年間を通じてGWT(グループワークトレーニング)を系統的に実践している一年生のあるクラスでは、生徒の協働的な取り組みをコラボレーションという言葉でキャッチフレーズ化し、クラスの行動目標として教師と生徒が意識するようになってきたという。さらに「CSR」を教材化した学習を環境学習プログラムの接続単元として行った二年生では、生徒が「地球温暖化を企業のせいにするだけじゃなくて、私たちもやらなきゃあ」と活動の意欲を高め、雪の降る冬の日の午後、学区の清掃を行った。この生徒たちも動かしているものは何か。この行動化のエネルギーの背景には、「自分はどうか考え判断するか」「自分自身はどうなのか」という内省的な「問い」を単元のまとめとして教師が問う授業が増えてきたことが一因であることが浮かび上がってきた。環境学習の成果が目に見えることは少ない。その中で、確かな判断や意思決定、さらには行動化を導くには、自分自身を見つめる、振り返る活動を繰り返す必要があることが焦点化されてきた。私たちはそれを「自己肯定感」であると

して今後、そのつながりについて実践検証していきたい。さらにESDで目指す七つの実践的能力の獲得も含めて「二十一世紀を生きる生徒」たちが身に付けたい力とは何かの議論を進めてきた。その結果、ESDを目指す教育の一部としてとらえなおした未来志向の二十一世紀型スキルを開発することができた。今後は、本校の教育実践の内容や計画を見直し、環境学習や総合的な学習の枠内にとどまらず、三つの大きなステージと十の目指す力の獲得・定着に向け、本校教育実践の具体的な取組を進めていきたい。

【コミュニケーションを行う力】

- ・窓から外を見た時「今日そろっているね」と友達と話すことがあるので前より気にかけてようになった。(3年女子)
- ・友達のスリッパを揃えた時に「ありがとう」といってくれて、そろえてよかったと思ったことがある。(1年女子)

【他者と協力する態度】

- ・真価フラッグがあげられると全校が1つになったと思えるのでとてもよいと思う。(3年男子)
- ・友達と一緒に整頓できたことが良かった。(3年男子)

【つながりを尊重する態度】

- ・とても良いことだと思います。そういう風に習慣づけていくことは大切です。大人になって社会に出てからも必要だと思うので。(2年女子)
- ・下駄箱でそろえられるなら、トイレスリッパもそろえられると思います。(1年男子)

【進んで参加する態度】

- ・脱ぐときに見てそろえながら脱いでいるのを見ると「いいな」って思う。(3年女子)
- ・自分の使ったスリッパをそろえるついでに周りのもそろえている人を見るのでみんながそうなればもっとよくなると思った。(3年女子)



日本の学校で書道の授業を体験

このように、実体験から子どもたちは自分なりの考えを積み上げているようだ。人から

教えられるのではなく、自ら築き上げる学びは、知識というより知恵となり、その子の人間形成の基礎となっていく。小学生時代の APCC 体験が原体験となり、グローバル人材の素地を形成していると私たちが考えている所以である。

国際交流イベントから国際教育活動へ

「アジア太平洋子ども会議・イン福岡 (APCC)」は、1989 年に福岡市で開催された国際博覧会の参加事業として始まった、市民レベルの国際交流事業である。当初は平和を希求し友好親善を推し進める国際交流イベントとして企画され、継続開催を望む声を後押しに、4 半世紀にわたり続いてきた。歴史を重ねるうち、2000 年頃を境として、この事業参加をきっかけに子どもたちが劇的に成長している姿に注目し、時代が要請するグローバル人材を育む取り組みへとプログラムに改善・工夫を加えて発展させている。

具体的な事業内容であるが、“ホームステイプログラム”の他、入国しホームステイに移る前の数日間に行われる、多国籍の子どもたちが一堂に会して友達を作る“交流キャンプ”，国を代表するこども大使として歌や踊りを披露する“パフォーマンスイベント”，一番身近な学校生活を体験する“スクールビジット”など、さまざまなプログラムで構成されている。夏休み直前の 7 月 10 日前後から約 2 週間、11 歳の子どもたち 40 数団のグループは福岡で一堂に会し、主に小学 4 年から 6 年生の子どもたちと交わりながら、一連のプログラムに参加していくのである。福岡での受け入れ家庭はもちろん、キャンプやイベント、学校交流サポートなどのあらゆる運営は、市民ボランティアによって行われている。1989 年以来、毎夏 27 年の間に、海外から受け入れた子どもと引率者の総数は 1 万人を超えた。また春休みや夏休みには、招聘事業で親交を深めたアジア太平

洋の各国へ福岡の小中高校生を送り、ホームステイや学校・地域での交流にチャレンジさせる派遣事業も行い、これまでに 2,000 人以上を海外へ送り出している。同窓会組織「ブリッジクラブ」もアジア太平洋 39 カ国・地域に設立され、地球市民のグローバルネットワークも広がっている。

草の根活動の可能性

APCC のユニークさは、子どもたちに自分と同世代の異国の友と、濃密な交流体験の場を提供している点にある。濃密な体験とは、インターネットや

ソーシャルメディアを介したバーチャルな交流ではなく、生身の人間同士



皆で力を合わせて

が出会うこと、そして相手と向き合わざるを得ない、逃れられない空間が用意されていることにある。今や、小学校でも外国語活動が活発に行われ、学校で外国人の先生や地域の留学生などと触れ合う機会は一般化しつつある。しかし出来ることなら、同世代の者同士が一对一でしっかりと向き合う交流の場を多く作りたい。

APCC では、福岡市をはじめとする各自治体教育委員会の協力も得ながら、夏休み直前のこども大使来福時には小学校で受け入れてもらい、出来るだけ多くの子どもたちが外国のこども大使と触れ合えるチャンスを増やしている。小学校にとって、外国からのゲストを迎え入れるための、安全管理、給食、体験授業カリキュラム作りなど、労力はかかる。しかし、日本の子どもたちにとって、その経験が貴重で価値あるものであることを、周りの大人、学校、地域が理解し、積極的にその環境を準備して行くことが大切ではないだろうか。この地道な積み重ねが、本当の意味でのグローバル人材育成を支えている。☺



言葉や文化がちがってもみんな友達！

11歳の異文化交流 ～グローバル人材への第一歩～

毎年7月、西はパキスタン、東はツバルやバヌアツといった太平洋上の島国など、アジア太平洋の30を超える国・地域から11歳の子どもたちが200人以上集まり、“We are the BRIDGE”をスローガンに、家庭、地域、学校で、約2週間にわたり異文化交流を繰り返す…そんな事業が福岡にある。「アジア太平洋子ども会議・イン福岡」。英文事業名の頭文字をとってAPCCと呼ばれる、27年続く取り組みである。“子ども会議”とあるが、いわゆる「会議」をしているわけではない。子どもたちのその後の人生に大きな影響を与える、小学生時代の異文化交流体験とは？ 参加者の声も交えながらAPCC事業を紹介する。



NPO 法人アジア太平洋子ども会議・イン福岡 事務局長
木本 香苗

子どもたちの等身大の異文化交流体験

「ハロー、ナイストゥーミーチャー、マイネームイズ…」子どもたちは照れながらも英語で挨拶を交わし、キャンディレイと呼ばれる菓子で作った首飾りを海外から迎えた“きょうだい”の首にかけていく。この出会いから約1週間のホームステイが始まる。満面の笑みで、片言の日本語も交えながら英語



ねえねえ、聞いて！

を流暢に話す子ども大使もいれば、シャイで無口な子もいる。ここから先は、私が日本の家族。子どもたちは早く打ち解けたい、仲良くなりたくないと懸命に取り組んでいく。言葉が通じず、相手が何を考えているのか分からずイライラすることもある。だからこそ、想像力を働かせ相手の思いをくみ取り、心を通わせ合う努力を積み重ねることになる。

11歳の子どもたちは、生活を共にする中でさまざまな違いや葛藤を体験する。ホームステイ中は普段の生活と同じように、一緒に学校に通い、近所の子どもたちと遊び、買い物に出かけ、夜は布団を並べて眠る。四六時中行動を共にし、異文化の友に向き合う濃密な時間となる。この間、子どもたちは我慢して他者と折り合いをつけることや、主張し合うことなど、いかにその友と向き合うか、自分なりに対処法を考え、試行錯誤を繰り返す。



一緒に遊ぼう！

その経験が子どもたちにもたらしたもの

11歳前後でAPCCの異文化交流を体験した子どもたちは、何を学んでいるのか。

「受け入れた時は日本以外にも人間っているんだな、と思った。テレビを見ただけでは、『外国のこと。ふん…』という感じだったけど、実際によその国の子が来て、全く日本語も通じなくて。日本じゃない国って本当にあるんだなって実感した」。この声に象徴されるように、子どもたちは外国を、目の前の友を通してリアルに感じ取る。同時に「服装や言動など外国と日本の違いを感じて、より自分たちの独特な文化について考えるようになった」と言い、自分が日本特有の文化をまとっていることを自覚し、自文化への関心も広げている。また「言葉や国が違って同じ子ども同士共通している部分があると感じた」と、同世代だからこそ「〇〇人」（例えばタイ人）と考える前に、同じ人間、同じ子どもとして相手を見るようになり、「外国の人」を特別視したり敬遠したりすることがなくなった、とも話している。さらに、母語以外でコミュニケーションするというチャレンジを経験し、多くの子どもたちは「知っている英語やジェスチャーで交流出来て楽しかった。もっと英語を勉強しないといけないと思った」と言い、小学生時代のこの体験が英語に興味をもつ第一歩になったと述べている。そして、身振り手振りでも分かり合えると感じる一方、「お互い言いたいことが通じなくて歯がゆかった。だから英語が出来るようになりたい」とコミュニケーション手段としての英語の有効性を実感し、英語学習への自然な動機付けにもしている。



▲ソーラーパネルを使って太陽光を集める実験。パネルの真ん中に置いた鍋でチョコレートを溶かし、チョコレートバナナを作ります。

福島県猪苗代町立長瀬小学校

「ここが地域の中心地」―先生と児童が共に学ぶ、エネルギー教育

福島県猪苗代町の長瀬小学校（児童数71名、鈴木哲明校長）では、2012年からエネルギー教育を行っています。2013年からの2年間は、県の再生可能エネルギー教育推進モデル校に選ばれ、いわき明星大学等の教育機関や北陸電力、地域行政機関などと連携しながら学習を進め、数々の賞を受賞しています。「身近なところにあるエネルギーを知り、学ぶ」取り組みを紹介します。

子どもたちの気付きと発見

長瀬小学校のエネルギー教育の取り組みは2012年に始まりました。福島中央テレビの企画で、風力発電所見学学習を受けたことがきっかけです。鈴木哲明校長先生は「子どもたちは見学学習や実験などを通して、身近な場所にエネルギーに変えられる物があると気付き、色々な発見をしています。学校で学んだことを子どもたちが社会で活用できるようにする頃までの見通しをもつて、教育に取り組んでいます」「自然エネルギーへ移行するには、少なくとも20〜30年必要だと聞きました。子どもたちが色々体験し、知る

べきことを知っているようにしたいと思っています」と仰います。子どもたちはとても好奇心旺盛で、登校途中に川辺の生き物を観察してなかなか学校に辿り着かなかつたり、「緑のカーテンを作ろう」とキュウリを校舎の壁に這わせて育てると、その傍らにキュウリ用の味噌と食塩が置いてあったり。「教室に入るまでに色々発見するものがあるんです。本当はまっすぐ教室に来て欲しいんですが」と笑う校長先生。

幅広い年齢構成で評議会を活性化

長瀬小学校はマーチング活動も盛んで、数々の賞を受賞しています。神谷毅教頭先生は「マーチング活



▲温度差を利用した発電装置の上に手のひらを置くと、風車が動き出します。

▲企業が制作した手作り乾電池キットで乾電池を製作中。「大雪の翌日、道路の雪が溶けているのを見つけた児童から『これは地熱発電を利用しているの?』と質問されました。エネルギー学習によって、子どもたちのエネルギーに関する不思議感や興味関心が高まり、身の回りの物への見方が変わってきました」と神谷教頭先生。

▼体育館で実験中。鈴木校長先生は「児童にはネット検索ではなく、なるべく文献で調べて欲しいので、定期的に図鑑などを購入し、先生方も意欲的に勉強しています。まず自分たちが率先して色々なことを知っていかないと、児童に紹介できませんから」と仰います。



動などのおかげで、学校と保護者の関係は非常に密接です。気軽に保護者に相談できるので、意志の疎通がとても早いのです」と仰います。また、現在の学校評議員の中には大学生になった卒業生もいて、評議員会活性化につながりました。長瀬小学校を中心に、地域全体で子どもたちを育てる体勢がしっかりと出来ていて、自然にコミュニティスクールに近い状態になっているのです。

多様性を大切に

年配の方が多かった学校評議員会に、最近では小学校OBの大学生も参加しています。鈴木哲明校長先生は「評議員が幅広い年代構成になり、先生方が色々なもの見方があることの面白さに気づきました」と仰います。

小学校の校名は、学校の近くを流れる長瀬川から由来しています。「いつも見ている川の水が水力発電の源になっていると、児童が知るのも大事なことです。自分達の小学校名の由来である川の水が、様々な形で生かされているのを再認識することになりますから」と神谷 毅教頭先生。

小学校と地域とが協働し、地域全体が学び育つ取り組みは、着実に成果を挙げています。

千葉

北海道

タブレットパソコン活用による「英語」反転学習の取組

土曜授業で子どもたちの豊かな学びの場を創る

鴨川市立田原小学校校長
臼井 治久

つながりでつくる栗山のふるさと教育

栗山町教育委員会

本校では平成 27・28 年度鴨川市教育委員会の研究指定を受け、タブレットパソコンを活用した英語学習の研究に取り組んでいる。研究主題は「英語で生き生きとコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成～チャレンジ学習（反転学習）を活かした授業づくりを通して～」としている。英語の反転学習を通して、児童の英語のコミュニケーション能力を育成しようとするものである。

栗山町教育委員会では、“ふるさととは栗山です”を合言葉に人々が輝くふるさとづくりを進めています。

近年は、子どもが激減し、地域行事や子ども会活動などから学ぶ機会も少なくなり、ふるさと栗山の自然や地域の人たちからの多様な学びが、一人一人の子どもの成長を支えていくと考えたからです。

反転学習を本校は「説明型の講義など基本的な学習を宿題として家庭で行い、授業中は個別指導をはじめ知識の活用や応用力の育成を行う教育方法」として捉えている。市内在住のアメリカ人教育関係者に作成していただいた英語のビデオ教材を 유튜브 にアップロードし、それを児童は学校から貸し出されたタブレットパソコンを用いて自宅で予習して授業に臨む。そして、授業では予め学習した表現や語彙を生かしてコミュニケーション活動を重点的に行うというスタイルである。

学校週 5 日制は、土曜日の少年団活動や部活動、家族や友人と過ごす時間として定着しつつありますが、中には行き場のない子どもたちが、有意義な時間を持てずにいるという状況があります。学校では、教師が子どもたちとじっくり向き合い、勉強したり、遊んだり、相談にのったりする時間の確保が課題となっています。

このようなことから教育委員会では、平成 26 年度、子どもたちの豊かな学びの場を提供する土曜授業を導入し、2 つの小学校において、実践的に試行することとしました。

反転学習を取り入れたことの利点は授業のみならず、家庭で予習をすることにより英語のインプットの量を増やすことができる。また、児童は自宅で動画を何度でも巻き戻し再生できる上、再生速度も調整できるため、より一人ひとりに応じた学習が可能となる。一方で課題は、児童全員が自宅でオンライン動画を見ることが出来る環境作り、効果的な予習方法の指導と徹底、家庭における自律的学習態度の育成である。

2 つの小学校では、年間 10 回の土曜日を登校日とし、地域や学校の特性に合わせて、アスファルト工場や肉牛牧場の見学、メロン農家での収穫体験、イグルーづくりなどの自然体験、地域の伝承文化や餅つき、地域住民と行う防災訓練など、学校、家庭、地域総がかりの教育活動を進めています。

子どもたちは、「いろいろな体験を通して多くの人とふれあうことができる。」と土曜授業を楽しみにしています。また、「テレビを見たり、ゲームをしたりする時間が減った。」という結果も見られました。

来年 1 月 22 日（金）、本校で授業研究中間発表会を開催する運びである。ぜひ、多くの方にご参会いただき、本取り組みの成果の一端をご覧いただくとともに、ご批評を賜ることができれば幸甚である。

教育委員会では、土曜授業の取り組みをきっかけとして、地域のみながつながり、地域とともにある学校を拠点にして、人々が輝く栗山の教育を実現したいと考えています。



兵庫

「自然への愛」「生命の尊さ」
手塚治虫のメッセージを伝えること宝塚市立手塚治虫記念館館長
前川 猛

日本を代表するマンガ家である手塚治虫は、その生涯において約700タイトル・原稿枚数で15万枚に及ぶマンガを描き上げ、60タイトルを超えるアニメーションを制作しました。特に、手塚治虫の連載マンガはそれまで絵物語中心であった雑誌界に一大変化をもたらし、ストーリー漫画中心の月刊誌全盛時代を作りました。またアニメの分野でも、1963年（昭和38年）に、日本で初めて毎週30分の国産長編連続テレビアニメシリーズ「鉄腕アトム」を放送開始します。

手塚治虫は40年余りの長期間にわたり、その類まれな才能と不断の努力によって漫画とアニメーションの第一線で活躍し続けました。その影には、初期のディズニータッチのマンガから、晩年の劇画風のマンガに至るまで、自分のスタイルに安住せず時代の流れに正面から立ち向かっていく、手塚のチャレンジ精神があったといえるでしょう。そして、彼の描く多種多様なストーリーの背後には「生命を大事にしよう」というメッセージがいつも描かれていました。

手塚治虫は1928年（昭和3年）に豊中市で生まれ、その後5歳から24歳までの多感な青少年時代を、自然豊かな宝塚で過ごしました。裏山での昆虫採集や、天体観測といった自然との触れ合いや、宝塚歌劇をはじめとするモダンな異文化の体験。そして悲惨な戦争経験など、宝塚で過ごし、体感したことが、手塚治虫の作品づくりにおける原点となっています。

宝塚市立手塚治虫記念館は、手塚治虫の精神である「自然への愛と生命の尊さ」を基本テーマとし、その偉業を広く後世に伝えると共に、青少年の夢と希望を未来へ広げていく施設として設立されました。手塚治虫記念館で、手塚治虫の心、そして世界を見て、触れて、感じて、たくさんの発見をしてください。



岐阜

高い「志」をもって町づくりに
貢献する児童生徒の育成

～リーダー養成塾「糧塾」の取り組みを通して～

岐阜県本巣郡北方町教育委員会

私たちは、ふるさとを心から愛し、21世紀を生き抜く児童生徒を育てたいと考えている。そこで、平成22年度に「子どもサミット宣言」を作成した。これは、児童生徒の代表者たちが町づくりへの願いを交流する中で生まれたキーワードである。学校、公共施設等に掲示され、活動を方向付ける羅針盤である。「子どもサミット宣言」を礎とし、「子どもサミット会議」の代表者を育成する組織が、リーダー養成塾「糧塾」である。「町づくりは、子どもが主役である」という熱い思いをもち、高い「志」をもって町づくりに貢献する児童生徒の育成を目指した。

具体的には、下記の実践を行った。

- (1) 教育長及び民間の社長による講話を通し、リーダーとしての心構えをはぐくむ取り組み
- (2) 「糧塾」メンバーでの合宿を通した異学年グループの取り組み
- (3) 学んだことを発表・提言する「子どもサミット会議」の取り組み

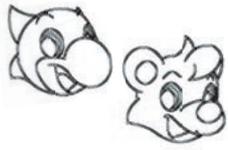
「糧塾」においては、P (Plan) - D (Do) - S (See) - I (Improve) - D (Do) サイクルを位置付け、特に、I (Improve: 改善) を大切に。「糧塾」での異年齢集団での取り組みを通して、リーダー性が育ちつつあることを実感することができた。

成果は、下記の点である。

- ふるさと北方町にかかわり、町づくりに貢献するリーダー養成塾「糧塾」への効果的な動機付けができた。
- 異学年グループを構成することで一体感が生まれ、小学生が中学生に憧れをもち、中1ギャップ解消に向けた意識が生まれつつある。
- 「子どもサミット会議」を通して、町づくりをリードするという誇りが生まれ、地域に貢献しようとする心が育ちつつある。

今後もこうした体験を通して、将来の町づくりに貢献しようとする児童生徒の育成に取り組むたい。





地球となかよしゼミナール

学校（現場）で学ぶ、 教員インターンシップ研修

熊本市教育委員会事務局・教育センター 指導主事 村山博子

「教育実習」と異なる学校現場での「学び」

熊本市教育委員会では、平成16年度から熊本大学教育学部との連携事業の一環として、教員をめざす4年生および大学院に在籍する学生を、熊本市立の幼稚園、小・中・高等学校にインターンシップ研修生として受け入れています。教員をめざす学生は、通常、一定期間の教育実習を経験しますが、その期間は数週間程度と短く、また、教科指導が中心となることから、学級経営や生徒指導にじっくり携わったり、校務や学校行事を十分に体験できなかったりします。そこで、このインターンシップ研修は10月から翌年3月までのうち2ヶ月以上を研修の間とし、また、学生の卒業論文などの作成時期を考慮して派遣先の学校と調整しながら少なくとも週に1日以上を実施することとしています。

研修のメリットと学校（現場）での活動内容

学生にとってのインターンシップ研修のメリットは大きく分けて2つあります。一つは、指導力の高い現場の先生のもと、授業や教材作成など補助的な業務をしながら、幅広く教師としてのあり方を学ぶことができること。そしてもう一つは、学校行事などに参加することで、子どもに対する理解を一層深めることができることです。学校現場での主な活動内容は、授業や学級担任業務、児童会・生徒会活動、各種行事、保健室業務の補



助などとなっています。教育実習とは異なった視点で、教師という仕事の大変さ、すばらしさが見えてきます。そしてここで「学び」が実教師になったときに必ず役立つ経験となります。

インターンシップ研修生の感想

これまでに研修に参加した学生の感想を一部紹介します。「インターンシップ研修では、教育実習と異なり全学年に関わったので、先生方の動きや子どもたちへの指導が学年によってどのように違っ

てくるのか、しっかりと学ぶことができた」「その時期ごとの子どもの姿や学校の様子を知ることができた」「問題が生じたときの対処法や、保健室登校の子どもとの関わり方を学ぶことができた」等々、教育実習の期間だけでは充分経験できない、この研修ならではの学びができたという声が多く寄せられました。

学校（現場）でしか学べないこと

教員インターンシップ研修は、一定期間、学校（現場）で様々な補助的業務を行うことにより、学校（現場）でしか学べない学級経営、生徒指導等について幅広く実践することができま

す。同時に、今後教師になるため、自分にとどのような能力を身に付ける必要があるかという課題の発見にもつながります。「教師になりたい」という思いを現実のものにしたいと本気で考えている学生にとって、インターンシップ研修は貴重な経験となります。また、学生によっては、この研修を授業と同様に単位認定されるなど、大学側からも研修への積極的な支援をいただいております。

コラム
PISAやTALIS 調査から見える
日本の教育の現状と課題 (全5回)

生徒アンケートから見える課題 (第2回)



目白学園 理事長
尾崎 春樹



1. 生徒の積極さや自信をどう引き出すか

PISA2012では生徒を対象としたアンケートも行い、その回答と数学的リテラシーとの相関も分析している。それによると、日本の生徒は(1)数学に対する「好き嫌い」や「将来役立つと思うか」などの動機付けに関する質問に分析対象の主要17か国中最も否定的に答えている。同様に、(2)「以下の問題を解く自信があるか」「数学は得意か」「授業についていけないか不安か」などの自己信念に対する質問に対しても最も否定的だ。

確かに2003年と比べて肯定的な回答が有意に増えてはいるが、生徒たちが相変わらず世界で最も消極的であることに変わりはない。

数学的リテラシーの結果は538点で65か国・地域中7位、OECD加盟国だけなら2位とトップクラスだから否定的な回答が多くてもそれは日本人の謙虚さの表れであって心配無用と思われるかもしれないが、そうはいかない。なぜなら、肯定的な回答の生徒の方が習熟度が高いという相関関係は世界中で見られ、日本の場合はその傾向がさらに顕著だからである。OECDのTALIS(国際教員指導環境)2013という中学校の教師を対象としたアンケート調査で、日本では生徒に「自信を持たせる」とか「学習の価値を見出すよう助ける」ことができていると答えた教師が参加国中で顕著に少ないことから、日本の指導方法の弱点が裏付けられる。

すなわち、日本の生徒は好成績のわりに動機付けや自己信念の点でかなり消極的であり、教師の指導によって生徒の気持ちを「好き」「将来役立つ」「自信が

ある」「得意だ」というプラス方向に転じる努力が払われれば、さらに生徒の向上の可能性=伸びしろがあるということである。

2. 家庭環境の格差是正と指導の充実は車の両輪

もう一つの課題は「格差」への注意である。保護者の教育歴・職業(管理職・専門職/単純作業従事者など)や家庭の学習リソース(勉強机・参考書・ICTなど)、文化的所有物(文学作品)などを総合的に社会経済文化的指標とし、それと習熟度との相関を見ると、日本は家庭の経済状況や教育環境の違いそのものが17か国中最小であり、またこの違いが習熟度に与える影響も相対的に小さい。

しかし、それでも家庭環境の違いが生徒の習熟度に与える影響は見逃せない。このことは、全国学力学習状況調査の中の保護者調査の分析で、「家庭の社会経済的背景の指数の高い児童生徒の方が、各教科の平均正答率が高い傾向にある」と明確に出ている。家庭の環境が恵まれなくても生徒の学習時間によってその差は相当程度克服できるが、しかし、家庭環境が最も恵まれないグループで平日3時間以上学習する子の平均正答率が、最も恵まれたグループで全く学習しない子に及ばないのである。

教師の指導方法の工夫などの努力や教育面での条件整備とともに、家庭の経済的・社会的環境向上のための支援が生徒の習熟度向上のためにも車の両輪として重要な施策であることを忘れてはならない。教育界の努力だけでは子どもたちの将来に対する支援としては十分ではないということだ。

イラスト ひらた ひさこ <http://kore.mitene.or.jp/~twins7yh/>

第13回

地球となかよしメッセージ

作品発表の
お知らせ

「第13回 地球となかよしメッセージ」入賞作品は
『Educo』2016年冬号(2016年1月下旬発行予定)
で発表します!

昨年度の入賞作品は、教育出版ホームページでごらんいただけます。

「地球となかよし」という言葉から感じたり、
考えたりしたことを、
写真やイラストにメッセージをつけて表現する
「地球となかよしメッセージ」。
今年度も、素晴らしい作品が集まりました。



「Educo」バックナンバーについてはお問い合わせください。

エスコートナース

山本ルミさん

エスコートナースの仕事

1998年から海外滞在中に病气やけがをした人を、医学的にエスコートしながら本国へ送り届ける「エスコートナース（搬送看護師）」の仕事をしています。国によって呼び方はさまざまで、フランスでは「エスコートナース」、アメリカでは「ライティングナース」、日本では「搬送看護師」と言っています。

仕事の大半は海外にいる日本の患者さんが対象です。けがや病气などで一人での帰国が難しいと主治医が判断した場合、患者さんのご自宅や病院まで搬送します。患者さんの状態により、エスコートドクターがつく場合もあります。仕事の7割は日本人の患者さんを迎えに行くこと、3割は日本滞在中の外国籍の方を現地へ搬送することです。去年はヨーロッパ各地やモンゴルなどへ行き、エスコートしました。

感謝される喜び

26歳の時、長く勤めていた大学病院から、六本木のインターナショナル・クリニック（現在は閉院）に転職しました。患者さんは外国の方ばかり。最初は英語で十分に対応できず、患者さんから苦情を言われたこともあり、「これではいけない」と、夜学に通って英語の勉強を続けました。ある時、韓国に患者さんを送り届けることになりました。英語も韓国語もわからない状態でなんとか病院に着いたら、患者さんの

ご家族が何度も「有難う」と言ってくれました。

その時に、「看護師の経験を生かして、感謝されて、海外へも行ける。いい仕事だな、これからはやりたいな」と思っただけです。それが、エスコートの始まりでした。当時は、搬送の依頼が来ると、トレーニング中の看護師さんに来ていただいで、留守中の仕事準備を全て整えてから出発していました。のちにフランスにあるMedic Air（メディック・エア）にただ一人の日本人エスコートナースとして登録し、その5〜6年後にシンガポールに本店のある「International SOS」の東京支店に登録しました。

いつもベストを尽くして

旅行保険会社は複数のアシスタンスサービス会社と契約していて、その会社の一つに私は登録しています。アシスタンスサービス会社はけ



がや病气だけではなく、紛失物対応や患者さんの主治医さんへの問い合わせ、お見舞いなどもします。手術費用や保険対象範囲などを確認し、患者さんやご家族のご意向を伺いながら話を進めます。そして医師が、患者さんが帰国する際に看護師が必要だと判断し、その証明書がでたら、すぐにアシスタンス会社から私に連絡が来ます。先日は深夜0時過ぎに電話が鳴り、「今日、パリに来てもらえませんか?」と言われました。取材の約束があったのですが、「この件は是非お願いします」と言われ、すぐに準備して空港へ向かいました。

患者さんの搬送中は、飛行機の乗換えが上手くいかなくなったり、受け入れ先の病院が決まらなかつたりすることもよくあります。いろいろな経験しながら、自分でマニュアルを作り、試行錯誤しながら取り組んでいます。

エスコートナースになる条件としては、まず正看護師の免許を持つこと。いろいろな科を経験して、豊富な知識と経験がある人が望ましいです。患者さんは年配の方が多いので、複数の持病をもっていることが多いからです。そして英語を使えること。患者さんは海外で病気になる不安で、私が行くと、皆さん「待つてました!」という感じです。患者さんにお会いしたら、あとは体力勝負。ほぼ不眠不休でケアします。この仕事は、サービス業でもありません。だから私は、いつもベストを尽くして、思いやりをもって接したいんです。

山本ルミ（やまもと・るみ）1967年大分県生まれ。東京慈恵医科大学附属病院を経て、93年より六本木の「インターナショナルクリニック」に勤務（現在は閉院）。1998年よりフランスのアシスタンス会社「メディック・エア」に登録、エスコートナースとして働いている。著書に「患者様は外国人」（COCOMEDIAハウス）、「空飛ぶナース」（新潮社）。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆「巻頭インタビュー」、相手への気配り・心配りをもって飯島さんが仕事をする様子が目につかぶようでした。（東京都・羽豆成二）◆「足立区のおいしい給食」の記事、参考になりました。今後の新しい取り組みを期待しております。（東京都 鳴川智久）◆尾崎先生の「(PISAの好成績の回復については)『瑣末な知識の記憶に時間を取られず、自ら考え表現する時間を作っていくべき』という教育政策が実践レベルでバランスよく実ってきたと考えるのが適当では」という分析に納得し、賞賛する。（山形県 佐藤敏彦）◆「きょういく見聞録 いたわりはげます平和な学校」、今号で一番心に残りました。「本校にしかできない未来を見つめた平和教育の構築を目指し、合言葉『平和は城山から』に恥じない責務を果たしていきたい」という中尾校長はじめ城山小学校の先生方の姿勢に感動しました。（茨城県 高山利三郎）



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。